



# 大学礼拝

Chapel News No.142

第142号 東北学院大学 2018年9月30日

巻頭言



宗教部長  
野村 信

## 「豊かな学びを」

人々は麦とぶどうを

豊かに取り入れて喜びます。

それにもまさる喜びを

わたしの心にお与えください。

(詩編第四篇四節)

秋を迎え、木々は色づき、朝夕は冷え、自然世界は冬支度を始めました。冬が来る前に、稲は穂を垂れ、果実は刈り取られ、動物の肉は腸詰にされ、寒い期間の保存食になります。最近では冷凍技術や農業技術の発達により、食生活においては季節感が薄れましたが、それでも人間の力では気候の変化を制御することは出来ません。

人間は、大自然が秋の実りを豊かに提供してくれる間に、これを貯蔵し、寒い冬を乗り越え、春を迎える準備をします。人間が生き延びられるように、むしろ自然が備えてくれています。

翻って、この時期に私たちの人生における実り、手応えは十分得ているでしょうか。私たちの心が十分養われ、積極的に生きる意味や意欲を十分獲得しているでしょうか。これは単に食料や金銭的な

蓄えがあれば良いというわけにはいきません。良く学び、深く考え、豊かに経験を積み、多くのことを先人から吸収して、自分の人生を実りある、手応えのある大切な一日として蓄積していかなくてはなりません。

冒頭に掲げた、秋の収穫期の喜びの歌を見てください。秋に刈り入れる麦はパンの原料となって保存がよく効きます。ブドウはワインにされて長期の貯蔵を可能にします。飼育している家畜のミルクや肉は、貴重なたんぱく質として随時摂取できます。こうしてどの国でも、どの時代においても、人々は秋の収穫感謝祭を祝い、新しい春の到来を待ちます。

しかしながら、旧約聖書の人々は、これで満足しませんでした。先に触れたように、人の生きる心の、霊的な養いがさらに必要だからです。すなわち、衣食住が満たされればいわけではなく、心が十分に養われ、生きる意味と喜びを獲得することが必要なのです。そこで、命の付与者、導き手なる神から、生きる、心の喜びが与えられることを願っています。

本学は創立百五〇周年に向かって「豊かに学び、地域へ世界へ、よく生きる心が育つ東北学院」とスローガンを掲げています。この「豊かな学び」とは、衣食住の充実としての実学だけでなく、心の、魂の養いとしての学びを含んでいます。この時期、大いに学び、勉学と同時に大学礼拝やキリスト教から「穀物にまさる喜び」を得る努力を続けましょう。それは学生の皆さんが将来に向けて「よく生きる」姿勢を養う大切な学びなのです。

## ランカスター神学校 からの出発



本学のホームページや掲示物などで、知っている人もいると思いますが、東北学院大学は、外国のいくつもの大学と国際交流の締結を進めています。その中でも今回取り上げたのは、アメリカのランカスター神学校との締結です。ランカスター神学校と言えば、高学年の学生の皆さんの中で、「アメリカ研究夏期講座」に参加した人なら、アーサイナス大学の寄宿舎に宿泊したはずです。フランクリン&マーシャル大学も加えて、この三つの大学は同じ母体(ドイツ改革派教会)によって設立された教育機関です。ですから三つの大学は隣接していて、田園風景の広がるペンシルベニア州のフィラデルフィア市、南部に位置しています。

すでに本学はアーサイナス大学やフランクリン&マーシャル大学との交流が盛んに行われていますが、ランカスター神学校とは、今年の7月に正式に国際交流協定を締結しました。この締結が意義深いのは、この神学校を

卒業したW・E・ホーイ先生と、D・B・シュネーダー先生が、今から132年前に来仙されて、押川方義先生と一緒に仙台神学校を設立したからです。



ランカスター神学校の本館(ドイツ風の外観)

本学に属するすべての人が、東北学院の三校祖の名前を知っていると思いますが、その内の二人の校祖がランカスター神学校の出身者ですから、同神学校と国際交流締結をすることは当然のことです。今年七月に本学に來校された学長のキャロル・リッチ先生は、これからさらにランカスター神学校と本学の交流が深まることを期待していると繰り返し強調されました。

8月には、この提携の実務を担当された文学部の鐸木道剛先生と学院の資料センターの日野哲氏が同校を訪問され、数多くの資料の収集をされて帰国されました。この資料収集で、これまで良く知られていなかった金子謹三のことも分かり、同地に眠る金子の墓地にも訪れました。金子は、東北学院創設時に本学の旧約聖書の教師として赴任する予定でしたが、若くして客死しました。これらの収穫はいずれ公表されますので、その時を期待しましょう。なお、私も8月の後半に国際学会に出席した折に、当校を訪問し、これからの交流の期待をリッチ学長からお伺いしました。学生の皆さんも本学と深い関わりのある三つの大学があることを知って、短期、長期に亘って、勉強することを目指してください。良い学びの時となり、かけがえのない経験を積むことになるでしょう。

(執筆 野村)  
(撮影 鐸木)



見つかった金子謹三の墓と日野氏

# Campus messages

各キャンパス担当の先生たちからのご挨拶

## 泉キャンパス

大学宗教主任 藤原 佐和子



「聖書って男ばかり出てきますね」という学生さんのコメントにギクリとしています。アブラハム、イサク、ヤコブの族長物語にしたって、父と息子の物語です。旧約聖書には登場人物が1426人いて、そのうちの91%が男性と言われています。そういえば、新約聖書に出てくるイエスの弟子たちも「十二使徒」と呼ばれる男性ばかりに思えませんか。でもよく読んでみると、「イエスと共にエルサレムへ上って来た女性たちが大勢いた」(!)という箇所があるではありませんか。聖書はエリート男性たちの手によって編纂されたので(イエスは何も書き残してないですよ!)、例えば、イエスの弟たちの名前は残っているのに、妹たちの名前は失われています。でも、イエス自身が女性たちを尊重していなかったら、こんなに大勢の女性たちがイエスと共に旅するはずがありません。大学礼拝では、皆さんと聖書の隠れたメッセージを解き明かしていきたいと思っています。

## 土樋キャンパス

大学宗教主任 川島 堅二



私の知り合いの方で40代半ばを過ぎてから牧師になるために神学校で学んでいる人がいます。彼は有名私立大学の文学部で日本文学を専攻、卒業後は大手の出版社に就職しました。就職の動機は、大学時代にとても個性的かつ魅力的な教授に出会い、その働きを出版という形で応援したいということでした。しかし、いざ出版業界に入ってみると現実にはベストセラーになる企画を出すことを強く求められ、せいぜい売れて数百部程度の専門書の企画はとても実現できないことを知ります。しかし、ベストセラーが売れるのはごく短期間、そこで次々と売れる企画を求められるという現実に悩みながら20年、ついに永遠のベストセラーでありロングセラーでもある聖書を真剣に学び、できることならそれを世に伝える牧師になりたいと思ったそうです。学院の礼拝で日々聖書に触れる機会が用意されていることがいかに貴重なことかと思えます。

## 多賀城キャンパス

大学宗教主任 木村 純二



ニュートンに代表されるように、十七世紀ごろから展開された自然界の科学的な探究は、元来キリスト教と結び付いていました。自然界をより深く知ることは、その創造主である神をより深く知ることにつながると考えられたのです。しかし、科学的知識は次第に人間社会に有用な技術開発に利用され、今では科学と技術は一つのものと思われています。たしかに科学技術は多くの役立つ働きをしていますが、同時に大量殺戮兵器や環境破壊など、それ以前にはなかった大きな不幸も生み出しています。科学的知識だけでは、本当の意味で世界を知ることができません。次の聖書の言葉を大学の学びの土台に覚えてもらえればと思います。

「知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる。自分は何か知っていると思う人がいたら、その人は、知らねばならぬことをまだ知らないのです。しかし、神を愛する人がいれば、その人は神に知られているのです。」(第一コリント8:1-3)



# 聖書の学び会 (聖書研究会)の様子

誰でも参加できます！



「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」(マタイ18:20)。聖書を読んでみんながそれぞれに思ったことを自由に語り、自分たちの日常を振り返り、喜びをも悲しみをも分かち合う時、私たちは聖書を単に「勉強する」以上に、キリストと共に、「聖書を生きている」のです。

泉

阿久戸義愛先生

のグループ



創世記を最初から少しずつ精読しています。各自持ち寄った昼食をいただきながら、気づいたこと、不思議に思ったことを分かち合っており、相談するのですが、今年度は聴講の方々も含め出席者が老若男女様々なので、話題が各方面に発展し、脱線してしまうこともしばしばです。笑いの絶えない時間です。

土 樋

北 博先生

のグループ



## 学院大夏の風物詩

「サマーカレッジ2018」  
現地レポート

大学宗教主任

川島 堅二

2018年8月3日から4日にかけて、第44回サマーカレッジが開かれました。天候にも恵まれ、参加者も1年生9名、2年生4名、3年生7名、4年生1名と、学年を越えて親睦と学びを深めることができました。

1日目はホーイ記念館を会場に一般にも開かれた公開講演会「キリスト教と現代―ITGでの学びが明日を変える―」で始まり、講師は東北学院榴ヶ岡高校の宗教主任、西間木順先生です。東北学院の建学の精神が「個人の尊厳の重視と人格の完成」「聖書の示す神に対する畏敬の念」「文化の発展と福祉に貢献する人材の育成」の3つを核にしていることが示され、それぞれについてグループワークによってわかりやすい言葉で置き換えることから始まり、さらに「3L精神」についても、「人格的応答」「マルチン・ブーバー」、「知識の光明」(ハンナ・アーレント)、「隣人愛」(アウグスティヌス、宮沢賢治)などのことばを引きながら深く説明がなされました。社会人として働いている卒業生の参加もあり、在校生にとってはよい刺激になりました。



午後からはバスでアクティブリゾーツ宮城蔵王に移動して、まずレクリエーションでアイスブレイクした後、証しの時を持ちました。証しは、角田修さん(情報科学2年)、石井葵さん(人間科学2年)が担当。具体的な日常生活にもとづくお話をされ感銘を受けました。紙幅の関係で内容をお伝えできないのが残念ですが、このほかにも東すみれさん(言語文化3年)が担当した開会礼拝、藤江惟志さん(共生社会経済3年)が担当した朝の祈りにおけるメッセージも素晴らしいものでした。

2日目は藤原佐和子先生による講演「現代のキリスト教とジェンダー／セクシュアリティ、#MeToo以後を考える」です。ジェンダーの視点からの聖書解釈、教会の歴史と現在が紹介された大変刺激的な内容でした。学生からは「キリスト教が父権制に傾斜した背景を再認識できた」「DVの現実を知れてよかった」「誰もが当事者になるかもしれないと意識することが大切」などの声が聞かれました。また午後には、昨年台風のため断念したモフモフの殿堂「蔵王キツネ村」訪問をし、キツネやウサギとの交流を楽しむことができました。

大変充実した2日間でしたが、ご多忙中、講師を引き受けてくださった西間木先生、裏方で支えてくださった職員の方々に心から感謝申し上げます。



# 『自分らしくを新しく』

聖書 フィリピの信徒への手紙3章1～11節



日本基督教団  
聖学院教会主任牧師  
ひがしの ひさし  
**東野 尚志**

何年前か前、東京の駅で見かけたポスターに、「わたしらしくをあたらしく」とありました。心に留まりました。誰にも、その人らしさがあります。しかし、改めて考えたとき、「自分らしさ」とは何でしょうか。そもそも、私たちは、「自分」というものを本当に正しく知っているのでしょうか。

ポール・ゴーギャンという画家は、晩年、印象深い絵を遺しました。横幅四メートル近い大きな絵の右から左に、人生の始まりとしての誕生、成年期、そして死が象徴的に描かれ、「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」と記されています。その問いは、人生観、世界観と深くつながります。自分らしく生きようとすると、私たちが何者であり、何を喜びとし、誇りとして生きているかが問われるのです。

伝道者パウロは、獄中からフィリピの教会に手紙を書き送って言いました。「主において喜びなさい」。その喜びは、私たち自身の条件によるのではなく、主において、主に結ばれて知る喜びです。礼拝において、神の前に立たせられるとき、自分の力や生き方を根拠とした誇りはむなしくなります。自分だけには誇れても、すべてを見通しておられる神の前には恥じ入るしかありません。しかし、まさにそこでこそ、キリスト・イエスを誇る事ができる、とパウロは言うのです。

神は、自分で自分を救うことのできない私たちのために、大切な独り子イエスを救い主として遣わしてくださいました。このキリストが、私たちの弱さと罪をすべて引き受けてくださり、十字架にかけられ、命を捨てて、私たちの罪の償いを成し遂げてくださいました。そして、私たちが、神のものとして生まれ変わり、新しく生きることができるよう、死を突き抜けて復活へと至る真の命の道を切り拓いてくださったのです。このキリストを頼みとすると、キリストが私たちの誇りとなり、私たちはキリストを喜ぶのです。

人間的なレベルの話ですれば、パウロには誇れるものがたくさんありました。しかし、キリスト・イエスと出会ったとき、その一切は輝きを失いました。それまで自分の利益だと思ったものを損失とみるようになった、と言うのです。驚くべき価値の逆転が起きました。キ

リストを知り、キリストに知られることによつて、それまで自分を中心として構成されていた世界は、キリストという真の中心を得て、正しい関係の中に回復されます。キリストのまなざしの中に、私たちは新しく見出されるのです。

私たちが手にする携帯やスマホには、GPSが組み込まれています。宇宙にある衛星からの信号によつて、自分の位置が分かります。グローバル・ポジショニング・システム、全地球測位システムと訳されます。しかし、軍事衛星が作られるはるか以前より、宇宙をも突き抜けた天から、私たちを見ているまなざしがあります。それがオリジナルのGPS、ゴッズ・ポジショニング・システムです。ゴーギャンが残した問いは、私たちが、礼拝において、神の前に立つとき、神との正しい関わりの中でこそ、その真実の答えを得るのです。神のまなざしの中に捕らえられ、自分らしくを新しく始めたいと思います。



## ◆東野 尚志氏

一九六一(昭和36)年四月生まれ  
(京都府出身)

### 学歴

一九八五(昭和60)年三月 大阪大学  
人間科学部 卒業  
一九八九(昭和64)年三月 東京神学大学  
大学院修士課程修了  
一九九三(平成5)年十月～一九九五  
(平成7)年六月 オクスフォード  
大学マンスフィールド・コレッジ  
留学

### 職歴

一九八九(昭和64)年四月 日本基督教団  
横浜指路教会伝道師  
一九九五(平成7)年八月 日本基督教団  
鎌倉雪ノ下教会牧師  
一九九七(平成9)年四月 日本基督教団  
鎌倉雪ノ下教会主任牧師  
二〇〇九(平成21)年四月 日本基督教団  
聖学院教会主任牧師(現在に至る)  
聖学院大学総合研究所特任教授、  
聖学院みどり幼稚園チャプレンを  
歴任。

また、現在は聖学院大学非常勤講師、  
青山学院大学非常勤講師を兼務。その  
他、日本基督教団常議員、同関東教区  
議長、福音主義教会連合議長(学校  
法人聖学院理事・評議員、学校法人東  
京神学大学理事・評議員)

### 主な著書

●『改革教会における霊性』(大森講座  
XV) 新教出版社、2000)



# 『なかつたこと』になさらない神

聖書 出エジプト記3章1～14節



日本基督教団  
花巻教会牧師  
鈴木 道也  
すずき みちや

《モーセは、しゅうとでありミディヤンの祭司であるエトロの羊の群れを飼っていたが、あるとき、その群れを荒れ野の奥へ追って行き、神の山ホレブにきた。そのとき、柴の間に燃え上がっている炎の中に主の御使いが現れた。彼が見ると、見よ、柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない。モーセは言った、「道を求めて、この不思議な光景を見届けよう。どうしてあの柴は燃え尽きないのだろう。」

主は、モーセが道を求めて見に来るのを御覧になった。神は柴の間から声をかけられ、「モーセよ、モーセよ」と言われた。彼が、「はい」と答えると、神が言われた。「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。神は続けて言われた。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った。

主は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地、カナン人、ヘト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の住む所へ彼らを導き上る。見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」

モーセは神に言った。「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。」

神は言われた。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなただを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える。」

モーセは神に尋ねた。「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです』と言え、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがひありません。彼らに何と答えるべきでしょうか。」

神はモーセに、「わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだ。」

日本キリスト教団花巻教会の牧師をしております鈴木道也と言います。本日はメッセージのタイトルを『なかつたこと』になさらない神としました。少し変わった題名で、不思議に思った人もいるかもしれませぬ。

最近のニュースを見ていて思われることは、重大な問題がうやむやにされることが多々起こっている、ということとです。問題が「なかつたこと」にされることは、それによって傷ついている人の存在も「なかつたこと」にされるということの意味します。

ここ数週間ほど、セクシユアル・ハラスメントの問題がニュースで取り上げられています。皆さんもよくご存じのように、「MeToo」という言葉も世界的な広がりを見せています。これは見方を変えれば、この問題がこれまでずっと顧みられてこなかった、ということの表れでもあるでしょう。それによって傷ついていた方々が実際には無数に存在していたのにも関わらず、それら痛みが顧みられてこなかった。そのような状況に対して、もはや痛みを「なかつたこと」にはしない、その共なる決意が現在の運動に根底にあるのだと受け止めています。

また、「なかつたこと」にされているというところで私が思い起こさざるを得ないのは、原発事故と放射能の問題です。現在、日本の社会全体に

おいては原発事故そのものがはじめるからなかつたかのようにされてしまっている状況があります。原発事故とそれに伴う放射能の問題に苦しんでいる多くの人々の痛みが顧みられない現状に、強い危惧を覚えています。

自分の痛みが「ない」とされることは、私たちにとって最も辛いことの一つでありましょう。聖書を読んでいる思われるのは、神さまは私たち人間の痛み、苦しみを決して「なかつたこと」にはなさらない方である、ということとです。本日の聖書箇所である『出エジプト記』は、そのことを伝える代表的な書の一つです。

物語はエジプトで奴隷とされ苦しんでいるイスラエルの人々の叫び声を神が聴く、ということから始まり、それら痛みを「なかつたこと」にはしないため、神さまはモーセを指導者として立たせられます。

本日の聖書箇所は、モーセの召名の場面です。この場面の中で、神さまがご自分の名前を告げられる場面が出て来ます。《わたしはある。わたしはあるという者だ》(14節)。この不思議な名前をどう捉えるかは様々な解釈がありますが、本日は、この名前の中に神が「なかつたこと」になさらない方であることが示されていると受け止めたいと思います。神さまは一人ひとりの存在を見出し、光を当て、「ある」確かに存在

している」と宣言してくださっている方です。私はあなたの存在を、決して「なかつたこと」にはしない。それは「ある！」私はあなたの痛みを、決して「なかつたこと」にはしない。それは「ある！」。《わたしはある》という名前の中に、私はこの神さまの決意の声を聴きます。

痛みが「なかつたこと」にされること、それが自分ができることを考え、行つてゆくことができず、と願っています。

## ◆鈴木 道也氏

- 一九八三(昭和五八)年三月生まれ (大阪府出身)
- 学歴
  - 二〇〇七(平成一九)年三月 北海道大学 卒業
  - 二〇〇九(平成二一)年四月 東京神学大学 編入学
  - 二〇一一年(平成二三)年三月 東京神学大学 卒業
  - 四月 東京神学大学大学院修士課程(前期)入学
  - 二〇一三年(平成二五)年三月 東京神学大学大学院修士課程(前期)修了
- 職歴
  - 二〇〇七(平成一九)年四月 株式会社一麦 出版社入社
  - 二〇〇九(平成二一)年三月 株式会社一麦 出版社退社
  - 二〇一三年(平成二五)年四月 日本キリスト教団花巻教会主任担任教師として赴任
  - 二〇一五年(平成二七)年四月 盛岡大学付属高等学校 非常勤講師 (現在に至る)

# 秋の行事と予告

実りの秋を迎え、続いてクリスマスを迎える季節が近づいてきました。今後の幾つかの行事についてお知らせします。

年に2回、特別伝道礼拝を行います。春は教会に仕える牧師の先生方をお招きして聖書のお話を聞き、秋は社会で活躍している方々からお話をお伺いします。今秋の予定です。

1 秋季特別伝道礼拝のお知らせ			
10月10日 (水)	泉 キャンパス 礼拝堂	講師 菅原 哲男氏 社会福祉法人光の子供の家 理事長	時間 10時10分～ 11時00分
10月10日 (水)	多賀城 キャンパス 礼拝堂	講師 鈴木 重良氏 社会福祉法人仙台キリスト教育児院 院長	10時10分～ 11時00分
10月11日 (木)	土樋 キャンパス 礼拝堂	講師 菅原 哲男氏 社会福祉法人光の子供の家 理事長	10時10分～ 11時00分

## 4 待降節 (アドベント)

イエス・キリストの誕生を祝うクリスマス(12月25日)の前の四週間を「待降節」と呼び、その最初の日曜日を待降節第一主日と定め、教会の暦は始まります。キリストの誕生を暗い世界に光が誕生したと聖書では理解するので(イザヤ9・1、ヨハネ1・5)、夜の長いこの時期に光なるキリストが到来したことを祝うのは、時季にかなって嬉しいものです。家屋や街路にイルミネーションを飾るとい習慣は日本全国に定着しました。大学の諸行事は下記を参照してください。

## 3 収穫感謝日 (11月第四木曜日)

この季節に世界の各地で秋の収穫のお祭りが行われますが、キリスト教では、特に米国とカナダで盛大に祝われます。その起源は、1620年にさかのぼりますが、メイフラワー号に乗って新天地を求めて旅立った清教徒たちはアメリカ東海岸に上陸しました。しかし移住者の半数が失われるほど過酷な時を過ごし、翌年の秋に収穫が与えられて生き延びることができました。これを記念してお祭りを行います。秋の実りを感謝すると同時に、神に養われていることを覚え、感謝する日です。

## 2 宗教改革記念日 (10月31日)

ドイツのヴィッテンベルク大学の聖書学の教授であったマルティン・ルターは、1517年10月31日に、免罪符の販売などに関する公開質問状(「九十五箇条の論題」)を聖堂の門に張り出しました。これがきっかけとなって宗教改革が各地に広がり、プロテスタントと呼ばれるキリスト教の新しい教会の群れが誕生しました。私たちの東北学院はこのプロテスタント(福音主義、新教とも呼ばれる)教会の集まりに属しています。当日は大学礼拝やキリスト教学で、この記念日の意義について触れることと思います。

## 編集後記

今年の夏は、大雨、洪水、猛暑、台風、地震と自然の荒々しい力を感じる年でした。しかし秋の季節になり、美味しい果物や穀物が収穫できることは幸いなことです。自然は私たちに恵みをもたらしますが、容赦なく奪います。私たちは自然の一部ですから、自然と共生していくことが大切です。これからさらに地球全体の環境の悪化が懸念されています。資源を無駄にせず、環境を悪化させず、良い未来を築いていかなければなりません。未来は私たちの心がけ次第で良いものになるのです。皆さんの勉学の実りと心の養いと共に、自然を含めた世界全体の潤いを願っています。

二〇一八年九月三〇日

東北学院大学宗教部

編集者 野村 信

〒九八〇一八五一 仙台市青葉区土樋一丁目三番一



宗教部よりお知らせ

### クリスマス礼拝のご案内

泉公開 クリスマス	12月7日 (金)	説教者 水田 雅敏氏 日本キリスト教団 川平教会	18時30分～ 20時頃
大学 クリスマス	泉キャンパス 12月13日 (木)	説教者 朴 憲郁氏 (バク ホンウク) 東京神学大学 特任教授	10時25分～ 12時頃
	多賀城キャンパス 12月14日 (金)		10時25分～ 12時頃
	土樋キャンパス 12月13日 (木)		合唱団によるメサイアの演奏 15時00分～ 16時30分頃